

中級日本語学習者の口頭表現に見られる副詞の特徴

—ストーリーテリングを中心に

朴秀娟

◆要旨

本研究は、中級日本語学習者（以下、学習者）による口頭表現、とりわけ、ストーリーテリングにおいて、副詞がどのように産出されるのかについて考察を行ったものである。同条件で産出された日本語母語話者によるデータと比較を行い、学習者が産出する副詞には、①産出される副詞のバリエーションが少ない、②主観を表す副詞は産出されにくい、③話す内容に関係なく初級で学んだ特定の副詞を多用する傾向にある、④母語によっては、副詞の産出が少なくなることがある、という特徴があることを明らかにした。多くの副詞が語彙レベルでの導入に留まっていることが多い現状において、本考察の結果を通して、副詞、なかでも主観を表す副詞を中心に、実際の運用につながる適切な指導が必要であることを指摘する。

◆キーワード

ストーリーテリング、副詞、話し手の主観を表す副詞、中級日本語学習者

◆ABSTRACT

This research discusses how the intermediate Japanese language learners (hereafter: the Japanese learners) use the adverbs in their oral expressions, especially in their storytelling. Compared to the use of the adverbs by the Japanese native speakers, the Japanese learners have the following characteristics in their use of the adverbs: 1) they use less adverbs, 2) they rarely use the adverbs of the speaker's subjective attitude, 3) they easily use the specific adverbs that they learned at the elementary level even if the topics of the storytelling are different and 4) how often they use the adverbs is possibly affected by their native language. This research reveals the necessity of teaching adverbs, especially the adverbs of the speaker's subjective attitude, in an effective way that makes the Japanese learners output the adverbs properly.

◆KEY WORDS

storytelling, adverb, adverb of the speaker's subjective attitude, intermediate Japanese language learners

Characteristics Found in the Use of
the Adverbs in Oral Expressions
by the Intermediate Japanese Language Learners
Focusing on Their Storytelling
SOOYUN PARK

1 はじめに

日本語教育において、副詞は、「あまり（～ない）」、「もし（～たら）」、「いくら（～ても）」のような、特定の文法形式と呼応するものを除いては、別個取り立てて指導される機会は少なく、語彙レベルでの導入に留まっているのが現状である。語彙レベルでの導入に留まっているのは、副詞そのものは活用をせず、動詞や形容詞のような活用をするほかの品詞に比べ、文法的な練習をそれほど必要としないこと、また、副詞の主な機能は、出来事の骨組みとなる主語や述語としての機能というよりも、主語や述語によって示される出来事をより詳細に述べるための修飾語としての機能であり、副次的であるということにも起因していると思われる。しかし、副詞の習得が容易であるかと言えば、必ずしもそうではない。詳細については2節で述べるが、従来の研究では、学習者の副詞の運用には偏りが見られることや、習得が困難なタイプの副詞があることが指摘されている。このことを考えると、現行の語彙レベルでの導入が十分であるかどうかについては再考の余地があると思われる。そこで、本研究では、副詞の指導のあり方を考えるための材料の1つとして、とりわけ、口頭表現における副詞の指導につなげるべく、日本語学習者（以下、学習者と称する）が話しことばにおいて副詞をどのように産出しているのかについて考察を行う。その特徴から、どのような点に留意した副詞の指導が必要なのかについて探りたい。

以下、2節では、学習者の副詞の運用に関する先行研究を概観し、従来の研究において残されている課題について述べる。続く3節では、調査資料及びデータの処理方法について説明する。そして4節では、分析の結果を記述し、それに基づいた考察を行う。最後に5節では、本研究のまとめ及び今後の課題について述べる。

2 先行研究

学習者による副詞の運用に見られる特徴については、川口・佐々木（1996）、

渡辺（2010）、塚田（2017）など、数多くの研究において述べられている。しかし、その多くは、作文や論述文のような、書きことばを対象に調査を行っているものである。川口・佐々木（1996）、渡辺（2010）、塚田（2017）は、いずれも、日本語母語話者の使用実態との比較を行い、学習者の副詞の習得や使用に見られる特徴を述べているものであるが、「陳述副詞」、なかでも、「むしろ」、「もちろん」のような、「呼応をもたない副詞」の習得が困難であること（川口・佐々木1996）、程度副詞の出現頻度が高いこと（渡辺2010）、初級レベル（日本語能力試験のN4・N5レベル）の副詞及び話しことばで用いられる副詞の使用が多いこと（塚田2017）などが特徴として挙げられている。

話しことばを対象に調査を行ったものには小寺（2001）がある。小寺（2001）は、初級から中級レベルの学習者のOPIのインタビューに現れた副詞について調査し、考察を行っている^[註1]。その結果、使用頻度が高かった語はすべて初級教科書の前半に提出されているものであったこと、多用されていた「ちょっと」、「たぶん」、「いつも」には、語彙や文型の乏しさをカバーするためのストラテジーとしての使用が観察されたこと、また、程度副詞「ちょっと」に関しては、レベルが上がるにつれて使用用法にも広がりが見られたことを指摘している。

上に述べた従来の研究には、次の3つの点において、さらなる検討が必要であるように思われる。まず、従来の研究の多くは、先にも述べたように、書きことばを対象とした調査が多いということである。書きことばに比べて産出までに十分な時間が確保できない話しことばでは、異なる特徴が見られる可能性がある。次に、調査協力者による個々の産出物の内容が多様であるということが挙げられる。副詞の場合、主に修飾語として働くことから、その選択は文の内容によって変わってくる。そのため、「陳述副詞」、「程度副詞」、「情態副詞」のように、副詞を範疇化して比較した記述は可能であっても、調査協力者間に共通して見られる特定の副詞を対象とした記述は難しい。最後に、学習者単独による十分な発話量が確保できていない点である。小寺（2001）は話しことばを対象としてはいるものの、初級から中級レベルの学習者のOPIインタビューデータを考察対象としているため、学習者による一回一回の発話が短く、また、学習者6人によるものであるため、全体のデータ量もそれほど多くないことが

推察される。さらに、インタビューというテストの性質上、テストの発話をそのまま反復した可能性も否めないという点まで考慮すると、学習者単独による十分な発話量を確保することで異なる結果が出る可能性がある。

本研究では、このような点を従来の研究に残された課題とし、ストーリーテリングのようなまとまった話しことばを調査対象に、同条件で産出された日本語母語話者によるデータとも比較しつつ^[注2]、学習者による副詞の産出について、①産出される副詞のタイプ、②タスク（話す／書く）による違い、③トピックによる違い、④母語による違いの4つの観点から考察を行う。

3 研究方法

3.1 調査資料について

本研究では、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language)」(以下、I-JAS)の第四次公開データを調査資料として用いた。I-JASには、12の異なる言語を母語とする海外の学習者と日本国内の学習者(教室環境と自然環境の学習者)による発話及び作文データに加え、同様の調査で得られた日本語母語話者によるデータも収録されている。本研究では、海外学習者で、中国語(中国本土の学習者)、英語、韓国語を母語とする学習者及び日本語母語話者のデータを分析した^[注3]。また、学習者の日本語能力については、収集したデータの多くを占めている中級レベルに絞り考察を行った^[注4]。考察対象となった学習者及び日本語母語話者の数は、中国語を母語とする学習者が66名、英語を母語とする学習者が41名、韓国語を母語とする学習者が25名、日本語母語話者が50名である。

本コーパスには、学習者による発話データとして、「ストーリーテリング」、「対話」、「ロールプレイ」、「絵描写」のデータが収録されているが、本研究では、次に挙げる2つの理由から、「ストーリーテリング」(以下、ST)のデータを考察対象とした。

①ほかのタスクに比べ、学習者単独による、まとまった形での十分な発話量

が確保できる。

②同じトピックについて書かせたものである「ストーリーライティング」(以下、SW)も収録されており、口頭で産出された場合と、文で産出された場合との比較分析が可能である。

STは、次に示す図1と図2のイラストを見てストーリーを話すというものである(図1・2は、迫田ほか(2016)より抜粋)。図からも分かるように、登場人物の名前や日本語能力試験の旧2級以上の名詞語彙については、日本語と英語の訳が付与されている。そして、ストーリーを話してもらう前に、ストーリーの内容を確認する時間が約1分与えられている。最初の文は、ST1では、「ピクニック」「朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました」、ST2では、「鍵」「ケン、うちの鍵を持っていませんでした」と固定されており、それ以降が、調査協力者による内容となっている。SWは、STと同じく2種類のストーリーをPCで入力してもらったものである。STとSWの間には、ほかのタスクが実施され、40～50分ほど空いている^[注5]。



図1 ST1「ピクニック」

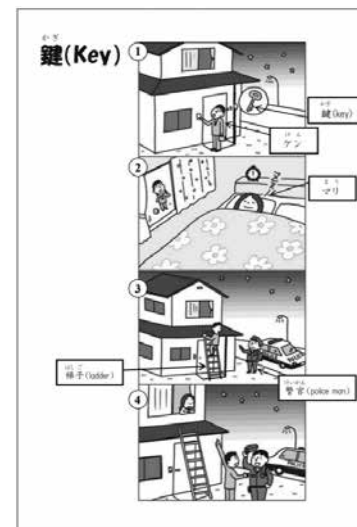


図2 ST2「鍵」

3.2 データの処理と関連して

本研究では、3.1で説明したI-JASのST及びSWのデータに見られる副詞を調査協力者ごとに抽出し、出現回数を数えた。数を数える際、繰り返しや言い淀みによるものは含めていない。また、次に示すものは、考察の対象外とし、集計には入れていない。ストーリーの描写以外で用いられている副詞（例えば、描写を始める前に発した「ちょっと恥ずかしい」における「ちょっと」など）についても、考察の対象外とした。

- ①時間名詞とも捉えられるもの 例) 朝、夜、今日
- ②数量詞とも捉えられるもの (ただし、「全部」、「すべて」については、学習者と日本語母語話者いずれにおいても使用頻度が高く、その使用傾向においても違いが見られ
たため、考察の対象に入れている) ^[注6] 例) みんな
- ③指示詞を伴った形式名詞とも捉えられるもの 例) そのまま
- ④格助詞を伴った名詞とも捉えられるもの ^[注7] 例) あとで、最後に、自分で
- ⑤次にあげる性質を持つ形容詞の連用形 ^[注8]
 - a. 内容を表すもの 例) 残念に(思う)
 - b. 合成述語の要素となっているもの 例) 暗く(なる)
- ⑥フィラーなのか副詞なのか判断が難しかったもの 例) なんか

これらを除き、考察対象となった副詞の数を示すと次の表1のようになる。

表1 考察対象となった副詞の総数

調査協力者の母語	中国語 (66名)	英語 (41名)	韓国語 (25名)	日本語 (50名)
タスク				
ST1	114	49	39	105
ST2	117	45	25	106
SW1	138	50	41	75
SW2	139	42	20	99

4 分析の結果と考察

4.1 産出される副詞のタイプ

学習者及び日本語母語話者によるSTのデータに見られた副詞のうち、出現回数が多かった順に上位10語までを示すと、次の表2、3のようになる(なお、10語目において出現回数と同じだったものについてはすべて示すこととする)。

表2 ST1に見られた副詞

学習者 (132名)		日本語母語話者 (50名)	
副詞	出現回数 (割合)	副詞	出現回数 (割合)
全部	56 (27.7%)	全部	14 (13.3%)
とても (／とっても)	22 (10.9%)	とても (／とっても)	11 (10.5%)
一緒に	18 (8.9%)	なんと	9 (8.6%)
全然	12 (5.9%)	すべて	8 (7.6%)
突然 (に)、もう	11 (5.4%)	一緒に	5 (4.8%)
ちょっと	10 (5.0%)	せっかく、楽しく、仲良く	4 (3.8%)
急に	9 (4.5%)	いざ、突然、ピョンと	3 (2.9%)
何も	5 (2.5%)		
すごく、楽しく、 ほんとに、よく	4 (2.0%)		

表3 ST2に見られた副詞

学習者 (132名)		日本語母語話者 (50名)	
副詞	出現回数 (割合)	副詞	出現回数 (割合)
もう	36 (19.3%)	ぐっすり (と)、ちょうど	10 (9.4%)
全然	23 (12.3%)	無事 (に)	7 (6.5%)
ちょっと	19 (10.2%)	まったく、もう	6 (5.7%)
大声で、ずっと	10 (5.3%)	大声で、仕方なく、 すっかり、すでに	5 (4.7%)
ちょうど	7 (3.7%)		
よく	6 (3.2%)	夜遅く (に)	4 (3.8%)
たぶん、とても (／とっても)、 何も、やっと	4 (2.1%)		

表2、3から、学習者によって産出される副詞のタイプには次のような特徴があることが分かる。

まず、学習者も日本語母語話者も、ST1では「全部」、「とても」の使用が上位を占めているが、ST2も含めて全体の使用傾向を見てみると、学習者の場合、日本語母語話者に比べて、副詞の使用に偏りが見られる。日本語母語話者の場合、ST1、ST2ともに、最も使用頻度が高いものであっても、15%未満であり、使用において特段目立っているものは見られない。一方、学習者の場合、副詞全体の使用において、ST1の場合「全部」が3割近くを、ST2の場合「もう」が2割近くを占めており、その使用が際立っている。これらの副詞は、日本語母語話者によっても使用されているが、全体で占める割合からも分かるように、ほかの副詞に比べて使用頻度が特に高いわけではない。意味・用法において類似しているものに、「全部」の場合「すべて」があり、「もう」の場合「すでに」があるが、日本語母語話者の場合、「すべて」や「すでに」の使用も上位に見られ、学習者よりも多様な副詞を駆使している。「すべて」、「すでに」ともに、N2・N3レベルの語彙であり^[註9]、既習である可能性が高いことを考えると、類似した意味・用法を持つものであっても、学習者にとって産出されやすいものとそうでないものがあることが分かる。

次に、学習者は、話し手の主観的、心理的態度を表す副詞（以下、「話し手の主観を表す副詞」とする）の産出が難しい^[註10]。これは、特に、ストーリーの展開において意外な出来事を含んでいるST1において顕著に見られる。ST1に現れた上位10語の副詞のうち、日本語母語話者には見られるが、学習者には見られないものに、「なんと、すべて、せっかく、仲良く、いざ、ピョンと」がある。このうち、「なんと、せっかく、いざ」は話し手の主観を表す副詞であり、学習者にとって、これらの副詞の産出は難しいことが窺える。「なんと」、「いざ」はN1レベルの語彙であり未習であるために産出されなかった可能性があるが、N2・N3レベルである「せっかく」の使用が一例も見られない点、また、学習者による使用のみに焦点をあてても、話し手の主観を表す副詞が上位10語には含まれていないという点から、学習者にとって、このようなタイプの副詞の産出は難しいということが考えられる。「本当に（ほんとに）」は、一見、話し手の主観を表す副詞のようにも見えるが、学習者による使用は、ほとんど

が（4例のうち3例）、次の例に見るような、程度のはなはだしさを表す程度副詞的なものであった（以下、例を挙げる際には、例の末尾に、本コーパスにおいて示されていた調査協力者のID番号を示す。冒頭のC、E、K、Jは、調査者協力者の母語を表し、それぞれ、中国語、英語、韓国語、日本語を意味する）。

- (1) あんー、あーん、やーバスケットに一、あ、バスケット内に、あーた、食べ物は、全部ーあー、あー食べーつくししまった。あー、彼らは、んー、ほんとに、んー悲しいです (CCH49)
- (2) え、えっとー、最後に、ケンとマリはバスケットの中に、をチェックして、えっとー太郎は、えっとー全部の一食べ物を食べてしまいまし、たからー、えっとー、ほんとに残念でした (EAU05)

4.2 タスク（話す／書く）による違い

STはSWに比べて、産出される副詞のパリエーションが少ない。次の表4は、学習者のSTとSWに現れた副詞の異なり語数を示したものである。

表4 学習者のSTとSWに現れた副詞の異なり語数

	ST1	SW1	ST2	SW2
異なり語数	33	48	49	58

トピックにかかわらず、SWの場合、STよりも異なり語数が増える傾向にあることが分かる。STに比べて、産出するまでに十分な時間が与えられるSWにおいて副詞のパリエーションが増えるのは当然の結果とも言えるが、副詞の具体的な内訳までも考慮すると、興味深い点が観察される。表5は、学習者のST1とSW1に現れた副詞について、表2、3と同様に上位10語を示したものであるが、SW1でも、産出される副詞のタイプはST1とほぼ変わらない。ST2とSW2の間にも同様の傾向が見られる^[註11]。このことから、産出までに十分な時間が与えられても、話し手の主観を表す副詞は産出が難しいということが分かる。

表5 学習者 (132名) のST1とSW1に見られた副詞

ST1		SW1	
副詞	出現回数 (割合)	副詞	出現回数 (割合)
全部	56 (27.7%)	全部	52 (22.7%)
とても (／ととても)	22 (10.9%)	もう	21 (9.2%)
一緒に	18 (8.9%)	とても	20 (8.7%)
全然	12 (5.9%)	一緒に	16 (7.0%)
突然 (に)、もう	11 (5.4%)	全然	15 (6.6%)
ちょっと	10 (5.0%)	突然 (に)	13 (5.7%)
急に	9 (4.5%)	急に	10 (4.4%)
何も	5 (2.5%)	何も	9 (3.9%)
すごく、楽しく、 ほんとに、よく	4 (2.0%)	こっそり (と)	6 (2.6%)
		ちょっと、本当に	5 (2.2%)

4.3 トピックによる違い

学習者の場合、トピックにかかわらず使用頻度の高い副詞が見られる。4.1で挙げた表2と表3を見ると、日本語母語話者の場合、表2と表3とで互いに重複する副詞は見られないが、学習者の場合、トピックにかかわらず共通して使用されている副詞が数多く見られる。なかでも、ST2において使用頻度が高かった「もう、全然、ちょっと」の3つの副詞は、ST1においてもそれぞれ10例以上見られている。日本語母語話者がこれら3つの副詞をまったく使用していないわけではないが、使用頻度は高くない。ST1ではそれぞれ1回しか使用されておらず、ST2でも、「もう」(6回・5.7%)を除いては、「全然」が2回使用されているだけで、「ちょっと」に関しては一回も使用されていなかった。

学習者によって使用されている「ちょっと」は、例(3)、(4)のように、ほとんどが程度や量が少ないことを示しているものである^[註12]。日本語母語話者の場合、ST1、ST2のいずれにおいても、程度や量が少ないことを示す副詞の使用は、例(5)のような「少し」の使用が、ST1、ST2においてそれぞれ1回ずつ見られただけであった。

- (3) えーバスケットの、あ一中を見て、えー、サンドイッチも、あの、あー、サンドイッチも、あその犬に、あーたべー、た、たべま、食べられました、が、あー二人はあの、えー、えちょっと、びっくりしました (CCH06)
- (4) それで一ケインが一、あー、ストリのぜんぶをちょっと説明して警官があー理解して、あー理解して、理解したんです (KKD45)
- (5) そちらで中を開けようとしたら、中から飼っている犬が出てきて、サンドイッチと林檎が、少し食べられてしまい、ケンとマリは困惑してしまいました (JJJ36)

学習者による「全然」、「もう」の使用に関しては、ある特定の場面で使用される傾向にある。「全然」は、ST1では犬がバスケットに入ったことにまったく気付かない二人の様子(図1・場面②)の描写に、ST2ではケンが呼んでもまったく起きないマリの様子(図2・場面②)の描写に用いられる傾向にあった。「もう」は、ST1ではバスケットを開けたら食べ物に犬にすでに食べられている様子(図1・場面⑤)の描写で、ST2ではマリがすでに寝てしまっている様子(図1・場面②)の描写で用いられる傾向にあった。日本語母語話者による使用場面においても同一の傾向が見られたが、日本語母語話者の場合、使用頻度が高くないことを考えると、日本語母語話者は、同一の出来事について必ずしも「全然」や「もう」を使って描写しているわけではないということが示唆される。類似した意味・用法を持つ副詞(例6)や、ほかの文法形式(例7)で描写されている可能性が考えられるが、今回は十分な分析ができていない。今後の課題とする。

- (6) え仕方の、ないので奥さんのマリに、がに起きてもらおうと声を出してみたのですけれども、えマリは全く気付いてくれません (JJJ04)
- (7) 残念なことに、二人のお昼ご飯のサンドイッチは、ポチに食べられてしまっていたのでした (JJJ08)

「もう、全然、ちょっと」は、いずれも、N5(もう、ちょっと)とN4(全然)

レベルの語彙であり、初級で学習する副詞である。このことから、学習者は、話題によって副詞や文法形式を変える日本語母語話者とは異なり、話題に関係なく、初級で学習したある特定の副詞を多用する傾向にあると言える。

4.4 母語による違い

学習者の母語によっても副詞の産出に異なる特徴が見られる。表6は、学習者と日本語母語話者のSTに見られた副詞の異なり語数と延べ語数をまとめたものである。語数の末尾にある括弧内の数字は、一人当たりの平均使用個数及び使用回数である（少数点第2位を四捨五入）。

表6 母語別に見るSTに見られた副詞の数

		母語			
		中国語 (66名)	英語 (41名)	韓国語 (25名)	日本語 (50名)
ST1	異なり語数	26 (0.4個/人)	14 (0.3個/人)	15 (0.6個/人)	44 (0.9個/人)
	延べ語数	114 (1.7回/人)	49 (1.2回/人)	39 (1.6回/人)	105 (2.1回/人)
ST2	異なり語数	36 (0.5個/人)	22 (0.5個/人)	14 (0.6個/人)	41 (0.8個/人)
	延べ語数	117 (1.8回/人)	45 (1.1回/人)	25 (1.0回/人)	106 (2.1回/人)

日本語母語話者に比べると、中級レベルの学習者は、産出される副詞のバリエーション、使用回数のいずれも少ない。日本語母語話者と同様に、トピックが変わっても異なり語数と延べ語数の数に大きな変化が見られない中国語を母語とする学習者と英語を母語とする学習者に注目すると、英語を母語とする学習者は、中国語を母語とする学習者に比べて、副詞の使用回数が相対的に少ない傾向にある。ST1に限って言えば、中国語を母語とする学習者、韓国語を母語とする学習者のいずれと比べても使用回数が少なく、副詞の産出には母語による差異が働いている可能性が窺える。

5 おわりに

本研究では、中級日本語学習者による口頭表現、なかでも、まとまりのある話しことばであるストーリーテリングを対象に、学習者の副詞の産出に見られ

る特徴について述べた。その概略をまとめると次のようになる。

- ①産出される副詞のバリエーションが少ない。
- ②主観を表す副詞の産出は難しく、産出に十分な時間が与えられてもそのような傾向は変わらない。
- ③話す内容に関係なく初級で学んだ特定の副詞を多用する傾向がある。
- ④母語によって副詞の産出が少なくなることがある。

上に示した結果は、副詞においても運用につながる適切な指導が必要であることを示唆する。特に、学習者には産出が難しいと思われる主観を表す副詞の場合、実際のコミュニケーションの場面では、述語で示される出来事そのものよりも重要な働きをすることがある。例えば、次のような場面では、「分からない」という事態そのものよりも、それを修飾している副詞「ちょっと」や「どうしても」が果たしている役割の方が大きい。「分からない」ということに対して、(8)の「ちょっと」にはやわらげの効果が、(9)の「どうしても」には、「答えを頑張って考えてみた」という暗示があり、「分かりません」一つで回答するよりも聞き手に丁寧な印象を与える。

- (8) A: この辺にコンビニはありますか。
 B: ちょっと分かりません。
- (9) A: Bさん、このクイズの答え、分かりましたか。
 B: いいえ。どうしても分かりません。

ただし、本研究では、学習者単独による発話を考察対象としているため、(8)、(9)のような、聞き手の存在が想定される対話の場面においても、学習者にとって主観を表す副詞の産出が難しいかどうかについてはさらなる検証が必要だと考えている。しかし、従来の研究で言われていることと総合して考えると、どのような場面であっても、学習者にとって主観を表す副詞の産出はそれほど容易でないことが予想される。また、今回、話し手の主観を表す副詞として分類した副詞の中には、「なんと」のように、ストーリーテリングという

談話の性質から、談話の場面展開に用いられる副詞とも言えそうなものが存在する。今後は、聞き手とのやり取りが生じる「対話」や「ロールプレイ」といった、ストーリーテリング以外の口頭表現においても今回と同様の特徴が見られるのかについて考察を深めていきたい。
 〈神戸大学〉

謝辞

本稿は、「日本語／日本語教育研究会 第11回大会」（2019年9月28日於学習院大学）で行った発表の内容に加筆修正を行ったものです。会場の皆さま、査読者の方々には大変貴重なご意見をいただきました。厚く御礼申し上げます。また、本研究の考察にあたっては、サンフランシスコ州立大学の南雅彦先生に多くのご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費JP17K13484の助成を受けたものです。

注

- [注1] …… OPIは、Oral Proficiency Interviewの略語で、ACTFL（The American Council on the Teaching of Foreign Languages（全米外国語教育協会））によって開発された汎言語的に使える会話能力テストである。詳細については、「日本語OPI研究会」のウェブサイト（<http://www.opi.jp/>）を参照されたい。
- [注2] …… 日本語母語話者の産出物との比較は、学習者の産出物に見られる特徴を明らかにするために行ったものであり、日本語母語話者と同様の使用を目指すべきであると主張するために行ったものではない。
- [注3] …… 12の異なる言語を母語とする学習者がいる中で、中国語、英語、韓国語を母語とする学習者のデータを考察対象とした理由は、ほかの言語を母語とする学習者のデータが50人分に留まっているのに対して、この3つの言語を母語とする学習者のデータは、最終的により多くの数が公開される予定であるからである（最終公開予定人数は、中国語母語話者が200人、英語母語話者が100人、韓国語母語話者が100人である）。のちに、より多くのデータを対象とした検証が可能であると判断し、ひとまずこの3つの言語を母語とする学習者のデータを考察対象とした。しかし、本研究で得られた結果は、ほかの言語を母語とする学習者のデータを用いて検証することも可能であると思われる。ほかの言語を母語とする学習者のデータを用いた検証は、今後の課題とする。
- [注4] …… IJASでは、学習者の日本語能力をJ-CATとSPOTの2種類のテストで測定している。J-CAT（Japanese Computerized Adaptive Test）は日本語能力自動判定テストで、聴解、語彙、文法、読解の4セクションから日本語能力を測定するものであり、SPOT（Simple Performance-Oriented Test）はTTBJ（Tsukuba

Test Battery of Japanese）の1つで、言語知識と言語運用の両面から日本語能力を測定するものである（迫田ほか2016:98）。本研究では、J-CATの得点を基準に、中級レベルと判断できる学習者を抽出した。具体的には、今井（2015:79）にある「レベルの目安」を参考にし、中級前半、中級、中級後半に分布する学習者を考察の対象とした。

- [注5] …… IJASの調査概要の詳細については、迫田ほか（2016）を参照されたい。
- [注6] …… 仁田（2002）は、「量の副詞」に関する記述の中で、「たくさん、大勢、いっぱい」のような典型的な量の副詞の周辺に位置する存在として、「全部、すべて、みんな」などを挙げている。これらは、典型的な量の副詞に比して名詞性が高く、「二つ、3個、4台」のような数量詞につながるものとして位置づけられている（仁田2002:191）。本研究ではこれらについては考察の対象外としているが、使用頻度が高く、学習者と日本語母語話者とで使用傾向に異なる特徴が見られた「全部、すべて」については、考察の対象とすることとした。ただし、副詞的に用いられているもののみを考察対象としている。
- [注7] …… なかには、副詞として一語化したものとの間で判断が難しいものも存在する。今回の調査では、当該の形で使用頻度がほかの格助詞を伴った形よりも圧倒的に高いものについては、副詞として一語化したものとみなし、考察の対象とした。なお、使用頻度の調査には、NINJAL-LWP for BCCWJ（<http://nlbninjal.ac.jp/>）を利用した（最終利用日：2019年9月22日）。本ツールは、国立国語研究所が構築した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」をデータに、名詞や動詞のような内容語の共起関係や文法的振る舞いについて網羅的に表示してくれるものである。
- [注8] …… 「朝早く」、「楽しく」といった、a、bのいずれにも該当しない形容詞の連用形については、副詞として扱った。形容詞の連用形を副詞として扱ってよいかどうかについては、学術的な立場によっても見解が異なると思われる。本研究では、「動詞のしめす動きや状態の質・よす、量・程度、および形容詞のしめす性質や状態や程度をあらわして、文のなかで修飾語（少数は状況語）としてはたらく品詞」（鈴木1972:462）を副詞として見なし、そのような意味・機能を担っている形容詞の連用形については副詞として扱った。
- [注9] …… 語彙のレベルは、「日本語読解学習支援システム リーディングチュウ太」（<http://language.tiu.ac.jp/>）を利用して判定した。以下同様。
- [注10] …… 本研究では、森本（1994）に倣い、意味的には話し手の主観的、心理的態度を表し、構文的には「疑問文に現れない」、「否定のスコープ内に入らない」という条件を満たすものを、「話し手の主観を表す副詞」とする。ただし、構文的特徴は、様態を修飾する副詞のような、ほかの副詞類とは異なる特徴を示すのであって、なかには、一部、上の条件を満たしていないものも含まれる。例えば、「きっと」、「ぜったい」、「かならず」は疑問文に現れうるが、森本（1994）では話し手の主観を表す副詞として分類されている。本研究でもそのような立場から考察を行った。
- [注11] …… SW2では、ST2では1例も見られなかった「幸い（に）」が5例見られた。し

かし、すべて中国語を母語とする学習者によるものであり、使用に偏りが見られる。

[注12]…… 次のように、程度や量の少なさを表していると見てよいかどうか判断に迷うものが9例あった。

- ・彼女と彼が、ち、あえー彼女と彼が、ちーじゅを見る途中に、あう、うー
ちよっと犬が、ピクニ、ピクニックのバスケットに入りました (KKD06)
- ・ケンさんはちよっと家にかえ、かえて、ん帰りたいです (CCH34)

参考文献

- 今井新悟 (2015) 「第4章 J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test)」 李在鎬 (編) 『日本語教育のための言語テストガイドブック』 pp.67-85. くろしお出版
- 川口良・佐々木泰子 (1996) 「日本人と日本語学習者の作文における副詞の発達過程に関する研究」 『お茶の水女子大学人文科学紀要』 49, pp.219-238. お茶の水女子大学
- 小寺里香 (2001) 「初級～中級学習者の発話にみられる副詞の使用について」 『岐阜大学留学生センター紀要』 2000, pp.76-89. 岐阜大学
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」 『国語研プロジェクトレビュー』 6(3), pp.93-110. 国立国語研究所
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 塚田智冬 (2017) 「日本語学習者の作文における副詞の使用状況に関する一考察—上級学習者と母語話者の論述作文の比較」 『日本語・日本文化研究』 23, pp.67-80. 京都外国語大学留学生別科
- 仁田義雄 (2002) 『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』 くろしお出版
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』 くろしお出版
- 渡辺史央 (2010) 「論述文に現れた副詞の分析—留学生と日本人学生の作文より」 『京都産業大学論集 人文科学系列』 41, pp.77-92. 京都産業大学